

(7)

翌々日、北澤は守谷の絵を見るために、《ギャラリー松井》を訪れた。

が、表のショーウィンドウの中にも、画廊内にも、守谷の絵は一枚も飾られていなかった。

北澤は受付の女性に事情を話し、松井画廊のオーナーに連絡を取って貰った。近くまで出ているだけだからすぐ画廊へ戻る、松井は電話口で、そう返事を寄越したようだった。

室内の椅子に腰をおろし、飾ってある絵を眺めながらオーナーを待った。北澤が絵を買いにきたと思ったのか、受付の女性が、売りに出ている絵の作者について説明したり、お茶を出してくれたりするので、彼は恐縮した。壁にかかっている絵は、どれもこれも、小遣いで買うにはあまりにも高すぎた。心を揺さぶられる佳品ではあったが、今の彼の生活に、絵を買って楽しむほどの余裕はない。

松井黎司まつい・れいじは、四十分余りしてから、ようやくギャラリーに姿を現わした。人の良さそうな、太り気味の中年男だった。急いで来たのか、玉のような汗を額に浮かべている。彼が近寄ってくると、周囲の温度が、二・三度上昇したような気がした。

「すみませんね。倉庫へ行って調べてたもんだから、遅くなっちゃって」

北澤は会社で使っている名刺を出し、守谷の友人だと名乗った。松井は名刺を見るなり、「あ、雑誌社の方。じゃあ取材か何かでこちらへ」

「いえ違います。今日は個人的な用事で来ました。倉庫とおっしゃいましたね。守谷光二の絵はそちらに？」

「ああ、単なるお友達ということですか。じゃあちようどいい。守谷くんの代わりに、あの絵、持って帰って貰えませんか」

「は？」

「いや、うちの倉庫狭いから。いつまでも預かってるわけにはいかんですよ。あなた車ですか？　じゃあ好都合だ。倉庫から持ち出して貰えませんかねえ。あるいは、幾らか出してお買いになりますか。それなら守谷くんも喜ぶと思うんですけどねえ」

倉庫への入り口は、画廊の裏手にもあるとのことだった。松井はあらかじめそちらで荷物を確認し、表へ回ってきたのだ。北澤は、室内から通じているドアへ案内され、埃っぽい室内へ足を踏み入れた。

倉庫の中には、荷のとかれていない絵や、展示用に使うワイヤー、額縁、ヒートンやテグスの箱、何が入っているのかわからないダンボール箱が数個。そして、渡瀬のログハウ

スに在る時に薫るような木材の匂いと、重い甘さを含んだ麻布の匂いが漂っていた。キャンパスの木枠と布地の匂いだ。何度か嗅いだ覚えがある。守谷の家に染みついている匂いだ。

絵は全部で五枚あった。油絵が三枚、アクリル画が二枚。大きさは全て50号。松井は額縁の箱から絵を取り出し、一枚づつ壁に並べた。北澤は作品を見るなり、思わず、ああ……と声を洩らした。

うまくなってるじゃないか、守谷！

昔よりも、ずっとずっと！

五枚の絵のモチーフは様々だった。まるで描き手が、自分に許されたあらゆる可能性を試しているかのように。溶け合うように描かれた街と森の姿、そこで暮らす人々の姿、樹木に絡めとられそうになっているように見える、繊細な魂の表現体。

守谷の描く森は、昔から、形の整った綺麗な森ではなかった。原初的で荒々しく、夜の闇の力を感じさせるそのくせ、どこか暖かく、見る人の心を和ませるものばかりなのだ。五枚の絵は、全て、その夜の雰囲気を用意していた。力強い生命感に溢れていた。守谷の絵だ。これは守谷光二の絵だ。どれもこれも紛れもなく、守谷の森そのものだ。

五枚のうち、一枚だけ、若い女性の姿を描いたものが

あった。湿地に迷い込んで困惑している、白いワンピースを来た女性。それは以前、守谷が売れたとっていた、あの赤い絵に描かれていた女性と、どこことなく顔立ちが似ていた。

「なぜ、これが売れないんです」「北澤は疑問に思って訊ねた。」「こんなにうまいのに。こんなに、素晴らしいのに……」「売れなかったのは、買い手がつかなかったから　ただ、それだけのことでですよ」「松井は、のんびりとした口調で答えた。」「うまいとかへたとか、そういう問題じゃないんです。絵は売れるか売れないか、ただ、それだけのことです。個人的には、守谷くんの絵はいいと思ってますよ。どんどん伸びて欲しいし、売れて欲しい。でもそのためには、ドー」と一発、大きな成功がないと難しいんですね。たとえばベストセラー作家の本の表紙を何枚も描くとか、売れてる化粧品メーカーのCMポスターを描くとか。あなた、そういう仕事に心当たりはありませんか。そういう方面で成功すると、風が向いてくるんですけどねえ」

「守谷も、そのことはよくわかってる筈です。でも、なかなかチャンスが掴めないんでしょう……」

「そうですね。守谷くんは、そういうところが、いまいち運が弱いんだなあ」

「東京の画廊では何点が売れたと言っていました。その後、そちらからの音沙汰はないんですか」

「さあ。聞いてませんね。まあ、関西と関東では美的センスにも違いがあるし、わたしらは、どういふものを描けとか描くなどは、言いませんし」

画廊を辞退したあと、北澤は先に自分の用事を済ませ、夜になってから、守谷のマンションを訪れた。

売れない売れないと言っているものの、資産自体は北澤よりも多いのだろう。転居届けを頼りに訪れた守谷のマンションは、オートロック管理の、りっぱなものだった。銃を持つようになつてから、守谷は、住居の安全管理に気を配るようになり、引越したのだ。今日まで来る機会がなかったのも、初めて見た彼の新居に、北澤は驚いたり困惑したりした。

暗証番号を聞いていない北澤には、オートロックを開けることができない。仕方がないので、インターホンで守谷を呼び出した。コールすると、すぐに反応があった。

「おれだ。先日は悪かったな。今日、おまえの絵を画廊で見ってきた。いろいろ話したいことがある。中へ入れてくれないか」

「今、忙しいんだ」インターホンの向こうの声は不機嫌だった。

「ギャラリー松井のオーナーから絵を預かっている。持って帰ってくれと言われたんで車に積んできた。これだけでも渡したい。降りてきてくれないか」

「わかった。じゃあ、すぐに行く」

北澤は車へ引き返し、五枚の絵を担いで、またマンションの玄関まで戻った。

守谷はすでに一階まで降りていた。暗い表情をしていた。目つきから、内面の荒れが伺えた。

「時々表に飾って、買い手を探して欲しいと言っておいたんだけどな」

守谷がいまいますように言うので、北澤は、その場で松井の言葉を伝えた。

「松井さんは、おまえが管理しているほうがいいと言っていた。絵を誰かに見せる機会は、おまえのほうがいい筈だから。頑張って伸びてくれと言ってたぞ。おれも久しぶりに見せて貰って驚いた。おまえ、うまくなってるじゃないか。失望するのはまだ早いよ。新しい仕事の相談をしないか。何かやりたいことや希望があるなら話してくれ。おれにできることなら、手を回してみるから」

その言葉に心が和んだのか、お茶でも飲んでゆけよ、と守谷が言った。北澤は喜んで従った。守谷と部屋で話し込むなど、何年ぶりのことだろう。出会った頃には、よくそんなことがあった。芸術論や社会論をぶちあげながら、明け方まで話し合っていたことが何度もある。激論に及べば及ぶほど、北澤は守谷の人柄に惚れ込んだ。守谷は伶俐で繊細だった。平凡な男や女にはない魅力があった。

少なくとも、以前の彼には……。

広々とした居間には、壁ぎわにベッドや大型TVがあり、中央にはソファや背の低いテーブル、ダイニングに近い場所には、洋酒が並んだキャビネットが設置してあった。窓ぎわには、よく育ったベンジヤミンの鉢と共に、見覚えのある立像が置いてある。二年ほど前、渡瀬が甲沢のログハウスで見せてくれた木彫りの立像

《マリカ》だ。

北澤は立像に近づくと、数年ぶりで見える叔父の傑作に、しばらくの間、見惚れた。

「これ、叔父が昔彫ってた……」

「そう。マリカだよ。ログハウスから、こちらへ運んできたんだ」

「叔父から買い取ったのか」

「そうだ」

「よく叔父が納得したなあ。展覧会へ出すことすら拒んでいたのに、他人に譲っちまうなんて」

「おれにとつて、どうしても必要なものだど理解してくれただらう。ここへ持ってきてから、毎日、眺めてるんだ」

守谷の手入れが良いのか、全裸の女性像は、以前見た時よりも艶やかに輝き、なまめかしい魅力を放っていた。顔つきが少し変わっているように思えた。以前よりも、は

つきりと微笑んでいるような気がする。多少彫りを加えたのかな、と思い、あらためて全身を眺めまわしているうちに、北澤は心に、妙な引っかかりを覚えた。この像の顔つき、最近、どこかで見たことがあるぞ。

「素晴らしいだろう、マリカは」

守谷は、コーヒー・カップを差し出しながら、北澤に話しかけた。熱いブラック・コーヒーを受け取ると、北澤は頷いた。

守谷の賞賛は続く。「渡瀬さんは本当に凄い人だ。全くの素人なのに、いきなりこんなものを彫ってしまうんだからね。とても素人の仕事とは思えない」

「確かに、叔父の器用さにはずば抜けたものがあるからな。でも、これは偶然の傑作なんだろう？」

「傑作は偶然からは生まれえない。必ず、何らかの、精神的な蓄積のうえに成り立っているんだ。ただ好きだからという理由だけで、傑作を生み出すことなんてできやしない。全ては、ある種の計算と、無意識のうちに方向づけられた指向性とに関係しているんだ。渡瀬さんは、ある特別の感情を持って、この像を彫ったんだと思う。それが何かはわからないが、だからこそおれは、この像に狂おしいほどの感情を抱くんだ」

「彼女、迷惑がらないのか？ 部屋の中にこんな大きな置物があったら、何かと不便だろう？」

守谷が怪訝そうに訊ねた。「彼女って、誰のことだ？」

「誰って……おまえ。パブで言ってたじゃないか。生涯離れられないほど惚れ込んでる女がいるって」

「ああ、あれか」守谷は、ぼんやりと答えた。「あれはこれだよ。マリカのことだ」

「おい、「冗談はよせよ」

「マリカは一種の守り神なんだ」守谷は真剣な表情で答えた。「物を作る人間にとっては、喉から手が出るほど欲しい神様だ……。なあ、北澤。おれの絵が売れ始めたのは、マリカと出会ってからだということに気づいていたか？ そう、マリカは自分を愛してくれる者の願いを必ず叶えてくれる。だから、おれは彼女に求めた。おれの絵が売れるようにして欲しい、そのために力を貸してくれと。マリカは、二カ月でおれの願いを叶えた。おれは狂喜した。だが、代わりに　一生、こいつから離れられなくなった」

守谷は掌で像の肩を撫でた。堅い胸に額をおしつけ、目を閉じてじっとしていた。

「おい、しっかりしてくれよ」北澤は守谷を像からひき剥がした。頬を何度もはたいた。「大黒様や招き猫じゃあるまいし、こんなもの挿んだって絵が売れるものか。偶然の一致だよ。おまえは自分の実力で絵を売ったんだ。こんなものに騙されてどうする」

「でも、頼めば必ず作品が売れたんだ。本当なんだよ」

「じゃあ、今のおまえの有り様は何だよ。マリカを家に置いてるくせに、全然、売れてないじゃないか。何でも望みを叶えてくれる像なら、こんな時こそ役に立たなくてどうするー!」

「彼女は代価を要求する」 守谷は沈鬱な声で答えた。

「願いをかなえる代わりに、依頼者に代価を求めるんだ」「代価?」

「愛情　だよ。マリカは願いの成就と引き換えに、自分への絶対的な愛情を要求する。少しでもかまつてやることを忘れると、もう望みをかなえてくれなくなる。こいつは辛い作業だ。それでも望みを達成できるならと、必死になってやってきた。だが彼女は貪欲だ。大きな成功を得るためには、さらに大きな愛情をマリカに注いでやらなければならぬ。おれは懸命にマリカを愛したさ。毎日彼女のことを考え、彼女に会い、夜毎に抱いた。それでも彼女は、まだ足りないと言う。得たいものが大きければ大きいほど、もっと濃い愛情を注げと言う……。おれは疲れた。だが、こいつから離れることもできない。美しいマリカ、愛らしいマリカ。絵の世界で生きてゆくことはおれの生き甲斐だ。その夢を叶えてくれるのはマリカしかない。おれ一人の力では駄目なんだ。マリカがいて初めて、おれは陽のあたる場所へ出て行ける。志砕けて、挫折しなくても済むんだ」

「わからない……わからないよ、守谷」北澤は、怒りと苛立ちに体を震わせた。「おまえ、いったい誰に騙されてるんだ。何にとり憑かれてるんだ。昔のおまえはそんな奴じやなかったぞ。もつと強かった。自分を信じてた」

「やめてくれよ」守谷は、首を激しく左右に振った。「おれは強くなんかない。本当は弱い人間なんだ。最近になって、それがようやくわかった。人間の強さなんて、所詮は幻想だ」

「叔父のせいか？」北澤は直感して訊ねた。「おまえ、おれの叔父に何か言われたんだろう。そうなんだろう。よし。じゃあ、おれがおまえの代わりに文句言ってきてやる。謝らせてやるから 安心して待ってる。いいな？」

「渡瀬さんも、おれと同じなんだよ」守谷は弱々しく笑った。「マリカに願いをかけて、代価を払い続けていた……だが、一人では払いきれなくなって、おれにその片棒を担がせたんだ。今はもつ、おれだけに支払わせているけどね。あの人は確かに器用な人だ。引き際というものを心得ている。渡瀬さんにとって、マリカは人生の通過点に過ぎなかつたんだろう。だがおれは違う。一生、マリカに寄り添ってゆく。そして、誰もが成し遂げられなかつたような成功を収めるんだ……」

北澤は叫んだ。「叔父のところへ行ってくる」

「渡瀬さんは家にはいない。入院してるよ」

「何だって？」

「だから、おれはマリカを自分の家へ連れてきた。彼女が淋しがらないように。なあ、北澤。もしよかったら、おまえにもマリカを貸してやるぞ。マリカは、必ず、おまえの望みを叶えてくれる。きつと、ルポルタージユが売れるようになるぞ……」

「いるか、そんなもの！」

北澤は居間のソファをひと蹴りすると、そのまま守谷のマンションをあとにした。車を、渡瀬が入院しているという病院まで走らせた。

心の中に荒野が広がってゆく。荒れた大地を、ごうごうと冷たい風が吹き抜けた。何が願いを叶えてくれる像だ。守谷は狂っている。自分の中に巣くっていた暗闇に飲み込まれたのだ。そのきっかけを作ったのは、叔父の渡瀬和義。

北澤は、左手でステアリングを殴りつけた。

入院していようが何だろうが、絶対に聞き出してやる。問い詰めて吐かせてやる。いったい、守谷に何を吹き込んだのか。どうやって、彼の心を操ったのか。

返事次第では許さない。必ず償いをさせてやる。

勢いで病院までおしかけたものの、面会時間はとくに過ぎていた。病室の明かりは全て落とされ、夜勤の看護婦は渡瀬の病室番号を教えてくれたが、面会なら明日にしてくれと促した。「渡瀬さんは、調子が良くないので、もう眠っておられます。他の患者さんにも迷惑ですから」「頭に血が昇っていたせいで、病院の就寝時刻の早さをすっかり忘れていたのだ。いまましい話だったが、仕方のないことだった。明日、出直すことにして、北澤は病院の玄関を出た。

翌日は、午後から病院を訪れた。受付の女性に頼んで、渡瀬の主治医を呼び出して貰った。そして、病状について訊ねた。

担当医は渡瀬の病名を《深在性真菌症》と言った。聞き慣れない病名に、北澤は思わず、きょとんとした。いったいどんな病気なのか、想像もつかなかった。

医者は、ごく簡単に説明した。

深在性真菌症は、カビの一種である真菌が体内で異常発生する病気だ。傷口から侵入した真菌が血液の流れに乗って全身に運ばれ、あちこちの内臓に障害を引き起こす。炎症、化膿、潰瘍、肉芽腫の形成。病変はあらゆる場

所で発生する。脳・腎臓・肝臓・骨・心臓……。そんな恐ろしい病気がこの世の中にあつたのかと、北澤は思わず身震いした。

渡瀬の体内に入り込んだ真菌は、まず、肺を冒して肺炎を引き起こした。そのため緊急入院となつたのだ。現在、点滴と内服用抗菌剤で治療中だが、面会できる程度には回復しているといつて。

四階の個室が、渡瀬の病室だつた。

渡瀬はベッドの上で半身を起こし、「口から、カビの菌糸を吐き出しそうな気がするよ」などと、悪趣味な冗談を飛ばしながら、喉の奥でクククと笑つた。思っていたよりも元気そうなので、北澤は安心した。これで思う存分、渡瀬を問い詰めることができる。

「わたしは、守谷くんにマリカを譲るなんて言つた覚えは、全然ないぞ」渡瀬は北澤の質問に即座に答えた。

「貸すとも言つてない。持つて行けとも言つてない。彼が勝手にログハウスから持ち出したんだろつ。守谷くんがあの像に執着していたのは知ってるが、まさかそこまでとは思わなかつた。今度会つたら、ちゃんと言い聞かせておくよ」

「守谷の様子が変なんです。いったい何を吹き込んだんですか」

「わたしは別に何も……」

「嘘だ。守谷は、叔父さんとマリカの関係について教えて

くれた。叔父さんがマリカに払ってた代価って何です。それを守谷に肩代わりさせてるっていうのは、どっいいうことなんですか」

「あいつ、そんなことを言ったのか」

「ええ」

「そりゃ半分おかしくなってる証拠だな。絵が売れなくて苦労しているとは聞いてたが、ストレス性の妄想でも出始めたのか」

「狐と狸の化かし合いみたいなことならやめませんか、時間無駄だから」

沈黙がその場に落ちた。お互いが相手の出方を見ていた。こっいいう時、渡瀬は絶対に自分から喋り出そうとはしない。後手に出ることで自分を守る。だが、北澤は先手に出て、相手を切り崩してゆくほうが性に合ってる人間だ。迷わず疑問を叩きつけた。

「守谷がおかしなことを教えてくれたんです。あの像に願いとをすると、どんな望みでも叶うんだって。彼はそうやって自分の絵を売ったそうですね。同じようにすればおれのルポルタージュも、売れるようになるんですか？」

渡瀬は表情を変えなかった。北澤の思惑など、底の底まで見抜いているような、冴えた眼差しで彼を見た。

「守谷はあれに狂っています」北澤はかまわず続けた。「絵

が売れなくて困っている筈なのに、口から出る言葉はマリカ、マリカ、マリカ、そればかりだ。あの像さえ持っていれば、必ず社会的な成功が得られると信じている。彼を、それほどめり込ませている理由は何です。あの像には、人間をひきつけて狂わせるような仕掛けがあるんですか」「知りたいか」渡瀬はもったいぶつた口振りで答えた。「知ってぶっする」

「おれも、自分の原稿が売れるようにしたい」

「嘘をつけ。おまえは野心なんかとは無縁の人間だ。温厚で、善良で、お人好しで……。おまえの努力は、ただの自己満足だ」

「……」

体をちよつと揺すり、渡瀬は両腕を組み合わせた。少しだけ口の端を吊りあげた。「おまえは、守谷くんをどうしたいんだ？」

「まともな人間に戻します」北澤は率直に答えた。「おれが知っていた頃の、守谷光二に」

「難しいぞ。一度大きな成功を見た人間は、次の成功へも執念深くしがみつく。金や生活や、己のプライドがかかっているのなら尚更だ。守谷くんだって、例外じゃない」

「どうやっても連れ戻します」

「おまえ、守谷くんに惚れているのか」

「友人として大切に思っています。彼は、社会へ出てから知

り合った、得難い親友です」

渡瀬は苦笑いを浮かべた。首を少しだけ傾けて言った。

「……おまえは《ウツホ木》というものを知っているか。いや、そういう言葉を聞いたことはないか。小さい頃、誰かから聞かされたり、本で読んだりして」

《ウツホ木》？ 聞いたこともない言葉だった。北澤が戸惑いがちに首を横に振ると、渡瀬は「そうか」とだけ呟いた。「わたしも人から聞くまでは知らなかった。そういう方面には全く興味がなかったんでね。ウツホ木というのは、中が空洞になっている木のことで。ウツホ柱とも言う。中が空洞になっている木や柱には、霊魂が入り込んで棲みつくことがある。と考える民間信仰が、日本には古くからあるんだ。マリカも、その一種なんだよ。あの像の中に存在している小さな空洞。そこに何が潜んでいるのかはわたしも知らない。だが、そのこと自体は問題じゃない。彼女の中にある空洞自体が、人を彼女にひきつけ、離れられなくする。なあ、隆史。おまえは人間が、なぜ偶像や内容の薄い流行物に魅かれるのか、その理由がわかるか」

「やあ……」

「からっぽだからだよ。中に何にもないからだ。そういうものに、人は魅かれることがある」

「……自分自身を、その穴の中へ流し込めるからですか？」

「そうそう、おまえはなかなか勘がいい」喉の奥から笑い声が洩れてきた。「あれはもう何年も前のことだ。わたしは、大阪の馴染みの店で一人で飲んでた。その時、店のマスターから、奇妙な話を聞かされたんだ……」

*

あれは何年か前の夏だったと思う。勤務先が倒産し、新しい会社の営業活動で走り回っていた頃だ。

今までとは勝手の違う仕事に、わたしは少々疲労と徒労を覚えていた。何しろ全て一からやり直しなんだからね。おまえは、わたしが株の儲けで困らなかつたろうと思っていたかもしれないが、損失だつてあつたんだ。いろんな事情で、あちこちに配らなきゃならない金や、事後処理を頼むための金も必要だった。賄賂の類もな。ていよく巻き上げられてしまった分もあった。手元に残ったのは僅かなものさ。それでも慎ましく暮らしている人間から見れば、たいした額だつたかもしれないがね。仕事を変わってから、は猟仲間とも疎遠になった。年収が違つと、だんだん話が合わなくなつてくるんだな。そのうち鳥撃ちには、一人で行くようになってしまった。

大阪に、証券会社時代からいきつけにしていたパブがあつてな。それほど高い店じゃないんだが、ひよろひよろし

た若者や、騒々しい女の子が来ない静かな店で、わたしは随分気に入っていた。店長とアルバイトのバーテンダーがいるだけの店だが、サービスは良かったし料理も旨かった。世間でビア・ガーデンが満杯になっていた時期、わたしは久しぶりにそこへ立ち寄った。

「しばらくですね。どうです、新しい仕事のほうは」

カウンターにつくと、他の客は若いバーテンダーに任せて、マスターがすぐに寄ってきた。

「さすがにビテるよ。慣れるまで、もう少しかかりそうだ」

「渡瀬さんでも、そういうことがあるんですね」

「医療機器は、相場を読むようには売れない。お医者さん相手の仕事も大変さ」

何種類ものチーズを盛り付けた皿が目の前に置かれた。わたしは景気づけにロイヤルサルートを飲みながら、しばらく世間話をした。軽い話題が次第に重くなり、ほとんど愚痴になりかけた時、マスターがさりげなく切り出した。「渡瀬さんは、カウンセリングなんかに興味はありませんか」

「何だよそれ。おねにクリニックへ行けっというのか」

「いや、心療内科を開いてる人じゃないんですが、出張診療みたいな形で、いろんな悩みを聞いて治療してくれる人がいるらしいんです」

「もぐりのセラピスト？」

「まあどうでしょう。外国で勉強してきた人かもしれない。でも、効果は抜群だつていう話です。一・二回面接を受けるだけで、人生観が全然変わってしまうと。若い人達から中間管理職の間まで、静かに評判が広がっているそうですよ。」

わたしは少し興味を魅かれた。新手の新興宗教のような胡散くささを感じたが、それだけに好奇心も湧いた。酒の追加を頼んでから訊ねた。「どこにいるの、その人」

冷たいグラスと共にメモが一枚差し出された。数字が幾つか並んでいる。携帯電話の番号だとすぐにわかった。

「一カ月以内なら、その番号で相手と連絡がとれるそうです。あとは、先方と渡瀬さんとで、会う日を決めて面談する。」

「この番号、どこで聞いた」

「人づてに頼まれたんです。もし興味を持ってる人があったら渡してくれと。相手の身元は保障します。名前は出せませんがこの客です。何かあれば、すぐに連絡を取ることできます」

わたしはしばらくの間、指先でメモを弄んだ。開業もしていないセラピスト。携帯電話を次々と持ち替えて、足がつかないようにしているのか？　そこまでしななければならぬ理由を、わたしは思いつけなかった。多分、ヤバイことに関わっている奴なんだろうが。効果か。人の噂

ほど当てにならないものはないからな。

「そんなにな有名な人なら、マスターも一度会ってみたらどうだ」

「わたしは、もう会いましたよ」

意外な返事だった。

「でも、そのメモは先方から直接渡されたんじゃないやありません。さっきも言った通り、人づてに貰ったんです。わたしが会ったのは、社会へ出てすぐの頃ですから」

「どんな人間なんだ」

「それは渡瀬さんが直接会って確かめて下さいよ」追求は、さらりとかわされた。「でなきゃ、楽しみが減るでしょうっ」

あるいは、マスターが会ったという話も嘘だったのかも知れない。だが、好奇心は、すでにかなりのところまで膨らんでいた。

わたしはパプを出ると、近くの電話ボックスに入った。メモの番号を「コールした。十一時頃だったので少し心配だったが、相手はすぐに反応した。

「はい、どちらへおかけですか」

男の声だった。若いとも中年ともつかない落ち着いた声だ。不愉快な響きや、いかかがわしさは感じられなかった。わたしはすぐに用件を切り出した。パプのマスターの名前を出し、面談を受けたいと申し出た。相手の男は、今週

の土曜日午後六時半、大阪のお初天神の前で待っていると答えた。わたしは承知して受話器を置いた。そして約束通り、土曜日にそこで一人の男と会った。

彼が、電話に出た男と同一人物だったのかどうかは知らない。だが、わたしは来た人物と話をするだけだから、気にはしなかった。男はタムズサと名乗った。どんな字を書くのか見当もつかなかったので訊ねると、掌に《玉梓》という字を綴った。歳はわたしよりも若そうだった。流行のジャケットとスラックスがよく似合っていた。俳優のように整った顔立ちをしていた。医者 of 威厳や堅苦しさはなかった。あるいは、セラピストというのは医者とは違うものなのかもしれないが、カウンセリングなど受けたことのないわたしには詳しい推測はできなかった。変な名前だ。どうせ偽名なんだろう。そんなことぐらいしか考えなかった。

男は、どこかで飲みながら話しましょうと言った。費用は自分が持つから、あなたの好きな場所を選んで下さいと。わたしは大手ビル会社が経営しているチェーン店を選んだ。男はそれで良いと答えた。

満席のビアホールで、わたしは男に、最近、人生に退屈しているのだと話した。

「わたしは今まで、いろんな仕事や趣味や遊びを経験してきた。だが、未だに魂の落ち着く先が見つからない。勤務

先が変わったら新しい発見があるかとも思っていたが、結局、今の仕事にもいつかは慣れて、惰性で流れてゆくだけだということに気づいてしまった。退屈なんだ。年を追うごとに、胸の中が空疎になってゆくのがわかる。こんなに豊かな生活をしているにも関わらず……だ。心の穴を埋めるものが欲しいんだ。一生退屈しないで済むような自分の情熱を注ぎ込めるような対象が欲しい。どんなものでいいんだ。心当たりはないですかね」

「わかりました」男はにっこりと微笑んだ。「あなたの不幸は、自分の中にあるエネルギーの使い方がわかっていないところにあるのですね。有り余る熱量を向ける先を迷ってらっしゃる。ならば話は簡単です。仕事・遊び・趣味……そういったものの中には存在していない充実感を、わたしがあなたに与えてあげましょう。住所を教えてくださいませんか。一・二日中に送りたいものがある」

「それは困るよ」「霊感商法のように、高価な壺や印鑑を送りつけられるのではないかと思い、わたしは住所を教えることを拒んだ。こちらは相手の情報を何一つ持っていないのだ。これを機会に、おかしな人間に自宅まで押しかけられては迷惑だ。」

「変なものを送るつとつというのではありません」男は笑顔を崩さなかった。「あなたには、彫刻用のセットを一組送るつと思ってるんです」

「何だつて？」

「わたしには、あなたが何を欲しているのかが良くわかる。仕事・趣味・遊び・友人・金・社会的な名誉……あなたが本当に欲しがっているのはそんなものじゃない。そしてあなたは、心の底では、もうすでに答を出していらっしやる。ただ、それが言葉にならないだけで」

「……」

「別に、彫刻を趣味にして貰おうと思ってるわけじゃありません。だが、彫ってみて下さい。彫ればあなたは、自分が何を望んでいたのかすぐにわかる筈です。鑿を持って木材の前に立つて下さい。その時、真っ先に浮かんだイメージを迷うことなく彫って下さい。彫りあがったものの姿があなたの望んでいた答そのものです」

馬鹿ばかしい話だった。所詮こいつは、他人の悩みにつけこんで物を売りつける類の人間なのだと思った。わたしが椅子から立ち上がると男は言った。

「信じないのは自由です。変な話を聞かされたと思って、このまま帰るのも一興でしょう。だが、もしここで帰れば、あなたはこの先、答の出ない問いを抱えて苦しみ続けることになる。それでもいいんですか」

「結構。変なものを買わされるよりはマシだからね」

「代金は後払いでいいですよ。答が出てからで」

「飲み代を出して貰う約束だったが、自分の分だけは払お

う。無駄足をさせて申し訳なかったな。別の客を当たって
くれないか」

「わかりました。では、自宅ではなくて、ログハウスのほう
へ送らせて頂きます。奥様の目につかないように」

わたしはギョツとした。わたしは男に、ログハウスのこと
なんか一言も話しちゃいなかった。勿論、あの酒場のマス
ターにだつて言ったことはないんだ。いつのまに調べたのだ
ろう。そう思うと気味が悪くなった。この男、どこまでも
執念深く追ってくるんじゃないかと思えて。

「仕方ないな、じゃあログハウスのほうへ運んで下さい」内面
の動揺を押し殺しながらわたしは答えた。ログハウスの住
所は、わざと教えなかった。

彫刻セットは、本当にログハウスまでやってきた。日曜日、
山へ行ったら、小屋の玄関に大きな包みが置いてあったん
だ。宅配便の伝票はどこにもついていなかった。つまりあ
の男は、直接、そこまで運んできたというわけだ。ご苦労
様なことだよ。

ずっしりと重い荷物を横抱きにして小屋の中へ運び込
み、ナイロンの紐を解き、包装紙を破らないようガムテープ
を剥がした。中には、段ボールで包まれた高さ一・七メー
トルほどの大きな長方形の木材と、鑿や彫刻刀のセット
が入っていた。説明書や、彫刻入門といった類の本はいつさ

いなかった。わたしはしばらく呆然としていた。やがて荷を元通りに包み直し、小屋の隅へ押しやった。

まさか本当に送ってくるとは思わなかった。だが、言われた通りに彫る気にもなれなかった。わたしは確かに手先が器用だが、こんなに大きな木材を彫った経験はないし、特にその時、彫りたいものもなかったのだ。代金を請求してきたら、手つかずのこれをそのまま返してやる。クーリング・オフの期間は法的には一週間だが、相手は荷に自分の住所も名前も書いていないのだ。幾らでも文句をつけることは可能だろう。

木材は、その後、一年近くもログハウスに放置されていた。おまえも何度か目にしたことがあるだろう。茶色の油紙に包まれた、あの大きな荷物だ。それはいつも、あの小屋の片隅にあった。誰の手にも触れず、包みを解かれることもなく眠っていた。だが、それはいつしか、わたしの心の中へ、一つのかげがえのない風景として沈殿していった。

一年の間、わたしは街中やTVで彫刻や彫塑を見るたびに、小屋に置きっぱなしにしている木材のことを思い出した。だが、それは必ずしも不快な感情ではなかった。買ったまま積読状態になっている本のことを思い出し、ああ、あれを読まなくてはなあ、と臍げに罪悪感を覚える時の感覚にとても良く似ていた。朝目覚めた時、ベッドに横たわりながら、木材を彫っている自分の姿を想像すること

もあった。鑿は雄々しく木を削り、小刀が嘗めるように木肌のうえを滑ってゆく。なかなか気持ちの良い空想だった。そして彫られてゆくモチーフは、動物でも神でもなく、わたしの場合、常に人間の女の姿だった。

男からの連絡はいつまで待ってもなかった。一カ月で無効になると言っていた携帯電話の番号は、その頃確かに、玉梓と名乗った男のものではなくなっていた。全くの音信不通になっていることを知った時、わたしは自分の手に鑿を握っていた。土曜や日曜に山へ登り、妻にも内緒で彫刻をするようになった。

木炭で各面にアウトラインを入れ、鑿の刃先をぐいと打ち込むと、あとはもう夢中になってしまった。木材を削るという行為には、元々、懐かしいような、安らぎを感じさせるような独特の官能性がある。大きな素材と向き合っていると、その快感は何倍にも増幅した。素人なのだ。彫り間違えればそこで終わりだ。無理をせず、慎重に刃を滑らせていった。彫れば彫るほど、彫ることに魅了された。木屑が舞い散るたびに、樹木の心地よい香りがあたり立ちこめた。何かを彫るというよりは、この木材の中に埋まっている何かを掘り出しているような気分だった。土の中から遺跡を掘り出す作業　わたしの彫刻はそれに近かった。木目の下から呼ぶ声に導かれ、わたしはその表面に、泥の如く張りついている木材を削りつつている

だけだった。

全てが洗い流された後、表面に浮かび上がってくるものの正体をわたしは既に知っていた。いや覚えていた。ずっと前からそうしたかったのだ。どうして忘れていたのだろう。堅く赤い木材の中に埋まっている、つるつるした肌の若い女。両手を広げ、誰かを抱きとめようとしている温かな女。あの男はなぜ知っていたのだろう。どこで知っただろう。わたしの記憶の底に沈んでいた哀惜と恨みの感情を、どうやって見抜いたのか。嗅ぎつけたのか。いや、そんなことはもうどうでもいい。土曜日の夜半遅く、像は完成した。小屋の明かりに照らされて、艶々と輝く像の顔と姿を見てわたしは泣いた。それはわたしが、十三歳の時に亡くした、実の母の姿だった。

その夜わたしは、一晩中、彫りあげた像を抱きしめていた。懐かしかったからじゃない。母に甘えたかったからでもない。その像を抱いていると、堅い木像の肌がいつのまにか柔らかい人間の肌になり、トクトクと、心臓の音まで聞こえてきたからだ。

……こんな話をしていると、おまえはわたしの気が狂ったと思うだろうな。そんな気味の悪い現象を目の当りにして、どうして逃げ出さなかったのかとも。だがそれは愚問だ。なぜなら、それこそがわたしの長い間の望みだっ

たからだ。堅い木像の腕や足が、しなやかに変化し、撓み、しっとりとした体に巻きついてくると、理性などどこかへ吹き飛んでしまった。激情だけがわたしを突き動かしていた。行き場を失っていたエネルギー、封印されていた感情、解放されて爆発する力。わたしは夜明けまで、何度も自分の母と交わった。

ずっとそうしたかったのだ。母が生きていた時も、死んで棺に入ってしまったてからも、ずっとずっと。理由なんかない。そんなもの知りたいとも思わない。母は、美しく逞しく優しかった。魅かれてゆく気持ちを、どうしても抑えることができなかった。だが、現実の世において、その望みが叶えられることはなかった。叶えられない思いは心の底に沈殿し、叶えられないがゆえに、わたしの内部をチリチリと焼き続けた。罪深い望み、愚かな情熱、わたしの内面を蝕む強烈な酸だ。人間として許されることのない欲望、時間と運命がかかるうじて引き剥がしたものを、わたしは強引に手に入れたのだ。それが偶然だったのか必然だったのかは、わからないがね。

朝が来ると、像は元通り木彫りの彫刻に戻っていた。わたしは、ベッドの上でぐったりと横になっていた。奇怪な夢に翻弄された一晩だった。いや夢ではない、現実だった。今でも体が覚えている。人間の肉の手触り、肉の重み、温

かい厚み。

机の上に置いていた携帯電話が鳴った。あの男からだうた。どうやって番号をつきとめたのか、問いたただす気持ちは既になかった。わたしは彫刻セツトの代金を訊ねた。男は郵便振り替えの番号を教えてくれた。請求された金額を、わたしは安いと感じた。百万円出したって惜しくない気分だった。

「幸せになられたようで何よりです」何もかも承知している声だった。

「わたしが彫ったあれは何だ」それだけが聞きたかった。「どっという仕掛けになってるんだ。なぜ、木彫りの像が生きた人間のように変化する？ 中に、何か特殊な装置でも入っているのか？」

「あなたは『ウツホ木』というものをご存知ですか、渡瀬さん」

「『ウツホ木』？ 何だそれは。聞いたこともないぞ」
「だったら結構。像の中に何かがあるのかは問わないことです。あれは『ウツホ木』だ。あるがままを受け入れる限り、あなたはいつまでも幸せでいられるでしょう。ただし、一つだけ注意しておいて貰いたいことがある」

「何だ」

「あの像は、あなたを喜ばせるためならどんなことでもしてくれる。そっいつぶつに作られている。しかし、像がず

っと活動を続けてゆくためには、燃料というか、エネルギー源になるものが必要です。この理屈はおわかりですね？」

わたしは電話を握り締め、頷いた。

「人間の愛情　それが、像の望む食物です。だからあなたは、これから毎日のように、像に愛情を注いでやる必要がある。そうしている限り、あなたの心に穴は生じない。心の空疎感は消える。もし、自分一人で手に負えなくなったら、他人の手を借りても像に食事を与え続けて下さい。わかりましたね」

「もし、食事を与えられなくなったら？」

「あなたは自分自身の穴に食われて破滅する。そして、望んでいたことの全てが崩壊する」

「……」

「その像を、心の中から呼び起こしたのはあなただ。現実化させたのはあなただ。あなたには、自分が作ったものに対して責任を負う義務がある」

「代金を払わせたのはそちらだ」

「この話を教えてあげるための代金です」

「おまえがいなきゃ、おれは像など彫りはしなかった」

「いや、いずれは彫った筈です。誰に言われなくてもね」

わたしは叫ぶように訊ねた。「おまえはいったい誰だ。

何者なんだ」

すると男は、初めて会った日のように一言だけ答えた。「玉梓」と。

電話はそこで切れた。

*

仕事があるんだ。毎日、像を訪ねてやることなんてできやしない。わたしは土曜の夜だけログハウスを訪れた。像はわたしと会うたびに人間になり、愛情を求めた。わたしは逆らうことなどできなかつた。あの男の言葉が体を縛っていた。まだ死にたくはない。こんなところで人生を終わらせてたまるもんか。

わたしは像に《マリカ》という名前をつけた。何とはなしに頭に浮かんだ名前だ。母を抱いているという罪悪感を消すために必要な、新しい名前だった。

一週間に一度だけの逢瀬に、マリカは満足しているようだった。わたしは内心ホッとしていた。この程度の訪問なら何とか都合がつく。マリカを手に入れて以来、気持ちは晴れ晴れとしていた。会社の仕事も順調だった。人間関係もうまくいっていたし、籤運まで巡ってきた。わたしの愛情を繋ぎ止めておくために、マリカが与えてくれた運だった。

そう、彼女は、世界を司る因果律に働きかける力を持つ

ているんだ。この世界を支配する仕組みは、無限に広がる鉄道線路のようなもので、その要所要所にあるポイントを、どのように切り替えるかによって、進むべき線路が決定されてゆく。マリカは、ポイントの幾つかを器用に動かす。全てを動かせるわけではないのだろうが、接続させる線路さえ間違えなければ、その力は必要最低限でこと足りる。

わたしは一時期幸運続きだった。だが、長続きはしなかった。運命の無理な操作は、人生そのものを枯らしてしまふのかもしれない。そしてマリカは、一週間に一度の《食事》では満足できなくなってきた。夢の中に現れてわたしを呼ぶようになった。

(和義、和義)

(来て、早く、わたしを愛して)

(もっと、わたしを愛して)

(そうすれば、もっと大きな幸せを、あなたに与えてあげられるのに……)

冗談じゃない、体がもつもんか。わたしは、マリカに愛情を注いでくれる、別の人間を探さねばならなくなった。マリカを手放す気はない。だが、わたしの力が及ばない部分を、代わりに満たしてくれる者が必要だ。体力があつて心優しく、物をいとおしむ感性を持ち、尚且つ、心に野心を抱いている人間。自分の運命を変えたいと切望してい

る人間。己の夢にとり憑かれている人間　そう、もうわかっただろう？　わたしは隆史、おまえを標的として選んだんだ。ルポライターとしての社会的な地位、書くことを生き甲斐にしたいと夢に飢えていたおまえに、マリカを押しつけるつもりだったんだ。

*

「だが、おまえを選んでみたものの、心もとないと感じる部分はあった」

ベッド上の渡瀬は、相変わらず、腕組みをしたまま枕に背をあずけていた。目の光はすっかりしている。熱に浮かされた妄想というわけではなさそうだ。でも、それなら、本当に気が狂ってしまったのかもしれない。真菌は既に、叔父の脳まで侵しているのだろうか。北澤は少しだけぞつとした。

「マリカは貪欲だ。おまえの愛情だけで彼女が満足できるかどうか……不安だった。それに、どうせ他人に任せるのなら、複数の人間に背負わせてしまったほうが効率が良いのではないか。そう思って、わたしはおまえに言ったんだ。『芸術のわかる人間を連れてこい』とね。芸術家なら、マリカの相手として相応しい人間であるような気がした。有り余るエネルギーを胸に抱き、その捌け口を求めて、

常に欲求不満状態にあるアマチュア芸術家なら、尚のこと良かった。そのうえマリカに魅了されやすい、繊細な感受性を持っている若い人間なら、申し分なかった」

「そしておれは、何の考えもなしに、守谷をマリカと引き合わせてしまったんですね……」

「守谷くんが、あんなに敏感に反応するなんて思わなかった。わたしは、おまえ達二人ともが、揃ってマリカにのめり込むだろうと予測していたんだ。だが、おまえは、自分の野心に対して意外と淡泊なんだな。あるいは、おまえの守谷くんに対する想いが強過ぎて、マリカの入り込む余地が無かったのかもしれない。結局、絵描きとして実力があって、大洋に乗り出しかけていた守谷くんのほうが引がかつてきた。しかし、当たり前と言えば、当たり前前の反応だったのかもしれない」

「守谷と親しくつき合ったり、猟に連れていったのは、そのためだったんですね」

「いきなり真相を話したって信じて貰えないからな。マリカのことを話題にしながら、わたし達は親交を深めた。ある日わたしは、守谷くんをログハウスに一人残して下山した。翌朝、何があったかを彼の口から確認して……あとはもう彼任せさ。守谷くんは、猟で山へ行った日には、必ずログハウスに泊まるようになった。わたしは気をきかせて、いつも先に下山した。他人がマリカと愛し合ってい

るのを見て喜ぶほど、わたしは変態じゃないかな

いからな。《ウツホ木》という言葉を、わたしはその後、書物で調べて知った。あの男はマリカのことを《ウツホ木》だと言った。つまり中が空洞になっていて　そこに何かが巣くっているんだね。何が棲みついているのかはわたしも知らん。どうせロクなもんじゃないんだろう。人間の愛情を喰って生きているんだからな。あとはもう、おまえの知っている通りだ。守谷くんはマリカに魅せられて彼女を愛し、マリカはその見返りに彼に成功を与えた。いつもの彼女のやり方だ。美味しい餌で釣っておいて、求める愛情の質と量をエスカレートさせてゆく。守谷くんは、今、氣息奄々といったところかな。実は、彼を選んで失敗だったと思ったことが一つだけあるんだ。守谷くんは人柄の良さに似合わず、独占欲が滅法強い。他人にマリカを任せれば自分は楽になれるのに、それができない。最近では、わたしが触れるのさえ嫌がるほどだった。ほとんど自分一人で相手をしているんだ。あのまま放っておくと腹上死しかねん。助けてやれ、隆史。今回のことではわたしも反省しているんだ。人選は、もっと慎重にすべきだったとね」

北澤は低い声で笑った。何て叔父らしい言い方なのだろうと思った。渡瀬はある意味でマリカと同じだ。いや、マリカ以上に悪魔的な存在なのかもしれない。

右手に力が籠もった。自分一人では抑えきれない真つ

黒な感情が、北澤の腹の底から、堰を切つて溢れ出した。

意識が一瞬空虚になり、直後、北澤は渡瀬の頬を拳で殴っていた。渡瀬の体がベッドの上で傾いた。渡瀬はとっさに片肘をつき、ベッドから転落するのをどうにか防いだ。同時に、吃驚したような顔で北澤を見た。まさか、甥が手をあげるとは想像もしていなかったというような表情だった。そこまで舐められていたのかと思うと、北澤は、ますます腹が立った。ちよつと待て、待て隆史、と叫んで制する渡瀬を、北澤は平手で何度も殴った。掛け布の上に鼻血が飛び散った。渡瀬は右手で顔を押さえて背を丸め、呻き声を洩らした。

呼吸が荒れ始めていたが、北澤の怒りはまだおさまらなかつた。ベッドの脚を蹴飛ばし、病室の壁を蹴飛ばした。床頭台の上の吸い飲みや、ティッシュボックスが振動で飛び上がった。もし渡瀬が病人でなかつたら、ベッドから引き摺り降ろして、蹴りあげてやりたいぐらいの気分だった。

同時に、北澤は自分自身に対して、猛烈に腹を立てていた。おれは今まで、自分が何様のつもりで事件記者などやってきたのだろう。叔父が生半可な人間でないことは知っていた。だが、まさかここまでとは思わなかつた。資金を援助してくれるという理由だけで、おれは叔父の存在に目をつぶり続けてきた。見て見ぬふりをしてきた。もっと大きな悪党を追えばいいんだと、自分自身を誤魔化

してきた。一人ぐらい身近に悪党がいたほうが、裏社会のことがよくわかっていいんだ、場合によっては、叔父から情報を金で買い取ってやろうとすら考えて。その結果がこれだ。

突き刺すような激しい後悔と、胸を焼くような罪悪感が、北澤の内面を引き裂いた。もし、守谷の人生に取り返しのつかないことが起きたら、その全責任はおれにある。おれは死んでもあいつを助けなきゃならない。自分の欲得のために失いかけているものを、絶対に取り戻さなきゃならない！

「……じゃあ今は、一刻も早く、守谷からあの像を取り上げなきゃならないわけだ」北澤は唇を噛み、呟いた。「おれはいつそのこと、あの像をぶっ壊してやりたい。木だから簡単だ。車で轢いてしまえばバブバブにできる。異存がありますか、叔父さん」

「ちょっと待て……それは最後の手段だ……」渡瀬はよろよろと体を起こし、掛け布の端で自分の顔の血を拭いた。そして、くぐもった声で答えた。「あの美しい像を壊すようなことだけはやめてくれ。心が痛む。それに、そんなことをすれば、守谷くんはおまえを決して許すまい。必ずおまえを殺すだろう」

「まじか」

渡瀬は全身の力を抜くように枕に背をあずけると、乱

れた髪を片手でかきあげた。嘲笑に満ちた表情で、上目遣いに北澤を見た。

「おまえは、マリカを知る前の守谷くんしか知らない。だが、今の守谷くんは別人だと思ったほうがいい……。彼らはもはや、おまえの言うことなんぞ、一言も聞きはしないだろう。病人のわたしを殴るように、彼を自由にはできないぞ。彼は射撃の名手だ。体力もおまえより勝っている。マリカのこと絡めば、とんでもなく残忍な性格に変わる可能性だってある。おまえに勝ち目はないよ」

「じゃあ、どうしろとっ」

「壊すよりも埋めるんだ。マリカを、人目のつかない山中へ……。そしてその時、わたしの遺骨をマリカの隣に埋めて欲しい。章子には遺骨を分骨をするように言うておく。マリカはわたしのものだ。わたしの体の一部だ。死んでからも一緒に寄り添いたい……」

北澤は自分の耳を疑った。渡瀬の言葉が、反芻されないままに、脳味噌の中を訝した。

「何を言ってるんですか、叔父さん。こんな病気で、死ぬわけないじゃないですか……」

「人間の命なんてわからないものさ。これは遺言だぞ。必ず守れ。いいな。そうだ、埋める場所はログハウスのある山がいい。わたしにとっては狩場でもある思い出深い山だ。春には桜が、秋には紅葉が美しい。あそこにしてくれ」

「でも、埋めるなんてそんな面倒なこと。第一、守谷が見つけて掘り出してしまったらどうするんです」

「その時はその時だ。何とか手段を考える。おまえを助ける方法を考えておくよ。わたしが死んでいても、有効な方法をな」

「……」

「いいな。約束だぞ。必ず守れよ」

渡瀬は体を前に折り、腹の前で両手を組み合わせると激しく咳き込んだ。口の端に血泡が浮いた。

「まいったな……」渡瀬は苦笑いを浮かべた。「まさかおまえが、ここまで本気になるなんて思わなかった。うんと効いたぞ、この乱暴者め。守谷くんは幸せな奴だ。だが、おまえも大抵にしておかんと、いつかその人柄の良さで、必ず、自分自身の身に破滅を招くぞ。適当なところで引き上げておけ。多少は、わたしの生き方を見習うんだな」

「……」

「あの男の名前、玉梓といった……」渡瀬は、ぼつりと呟いた。「玉梓というのは、日本の古い時代に使われていた言葉だ。《使者》という意味があるんだ。いったい誰が、何のために寄越した《使者》だったんだろうな。今となっては、どうでもいいことだがね……」

しばらくして、渡瀬は本当に死んだ。

真菌が再び活発化し、全身の内臓を侵し始めたのだ。

四十度以上もの発熱が何日も続き、薬は全く効かなかった。意識だけはハッキリしている分、それは大変な苦しみだった。が、高熱に喘ぎ、全身の疼痛に苦しみながらも、渡瀬は、憎まれ口を叩くことを忘れなかった。

「これが、今までのわたしの行為に対する報いだとしたら、収支はちゃんと合ってるんだろっかね、隆史?。」

保冷剤を詰めた枕のうえで、何度も苦しげに頭を左右に揺すりながら、それでも渡瀬は、北澤に向かってにやりと笑ってみせた。「どう考えても、神様って奴は怠け者だと思えんな。こんな程度の死に方で許して貰えるとは、勝ち逃げと言ってもいいんじゃないかね……。」

実際には、全身をじわじわと蝕む痛みに、気も狂わんばかりになっている筈だったが、渡瀬は、泣いたり喚いたりといった醜態を、北澤に見せることは決してなかった。

高熱と苦痛に翻弄されながら、渡瀬は徐々に衰弱し、この世から去っていった。まるで、煉獄の薔薇色の炎に焼かれるような死に方だったと、北澤は思った。

薬が全然効かなかったことから、医者は新種の菌かも

しれないと言い、真菌の影響による全身状態を診るため解剖させて欲しい」と章子にもちかけた。

「これだから大学の付属病院は嫌よ。うちの人を、研修医相手の見世物にするつもりなんだわ。ろくに治療もできなかつたくせに」

章子の頭の中には、医学への貢献という言葉は存在してないようだった。語気鋭く担当医を責めたて、強引に死亡診断書を書かせると、さうさと遺体を葬儀屋へ運び込んでしまった。北澤は叔母の強さを目の当たりにして、初めて彼女に好感を抱いた。

葬儀の時、北澤は、自分が渡瀬に魅かれていたのは、父親への反発からだったのではないかと、ふと思った。教職につき、品行方正を信条としていた父。嘘をつくことや、悪意や悪ふざけに満ちた会話が嫌いだった父。渡瀬は父とは正反対の人間だった。渡瀬を好きになることで、おれは自分が父親の中へ取り込まれてしまうことを避けようとしていたのかもしれない。現に、北澤の父は、未だに彼の仕事をよく思っていないかった。低俗な雑文書きなどやめろという。北澤が雑誌記者になることに賛成し、そのきつかけ作ってくれたのは、父親ではなくて、叔父である渡瀬だった。

遺骨を分けて貰うという約束を、北澤は内心持て余し

ていた。

(埋めてくれ、マリカと一緒にわたしの骨を)

その言葉に従えば、自分は守谷と大喧嘩になる。ヘタをすると傷害沙汰にもなりかねない。だが、放置しておけば守谷はいつか破滅するだろう。運良くマリカと縁が切れても、その頃には、心身共にボロボロになっているに違いなし。それは本意ではなかった。

葬儀の日、北澤は守谷に、もう一度マリカに会わせて貰えないかと訊ねた。時々は貸して欲しいのだ、とも付け加えて。

守谷の表情に驚きが広がり、ほどなく微笑が溢れ出した。「いいとも。運び出すのは大変だから、おれが留守の時に、ゆっくり鑑賞するといいよ……」

北澤とマリカを二人きりにするため、守谷はわざと外泊日を作ろうとしていた。北澤は何も知らないふりをして頷き、守谷から、マンションのオートロックを解除する番号を聞き出した。鍵のスペアは後日作成した。

考えてみれば、不思議なことではあった。渡瀬にすら触られるのを嫌がっていたマリカを、守谷は、北澤になら貸してくれるというのだ。さすがに自分の愛情に限界を感じたのか、あるいは、おれが自分と同じように苦しめばいいとも思っているのだろうか。マリカと出会った後の守谷は、もう昔の守谷ではない。そう言っていた渡瀬の言

葉が、心の中で苦々しく広がった。

東京の画廊や出版社へ出向くため、守谷は、しばしば家をあけた。

北澤は適当な日に、約束通り、マンションに泊まらせて貰うことにした。

作り主を失ったマリカは、それでも所詮は木像だ、悲しみもせず、いつものように居間に佇んでいた。渡瀬にとっては母親であつたというこの女の像に、守谷がこれほどまでに魅かれたのはなぜなのだろう、と北澤は訝しんだ。マリカは、確かに美しい顔立ちをしている。造形も見事だ。思わず手をふれてしまいたくなるような、上品なエロイシズムにも満ちている。だが、結局は木像じゃないか。なぜ、出会った瞬間、恋に落ちるような衝撃を受けてしまったのか。あるいは、それもマリカの策略だったのだろうか。守谷の中に存在するアニマを刺激するような表情を、他人にはわからぬ形でアピールしていたということなのか。最初に売れた赤い絵と、《ギャラリー松井》で見た森の絵に描かれていた女性の顔が、マリカとそっくりであることに北澤は気づいていた。守谷は確かに恋をしていたのだ。そして、恋をすることで作風が変わったのだ。これが本当の人間に対する恋だったら、どんなに良かっただろう。時々は自分も女性同伴で付き合いに混せて貰い、皆で遊びにいつ

たり、旅行していたに違いないのに。

北澤はソファに座り、缶ビールを飲みながらマリカを眺めた。愛情など、ひとかけらも湧いてこなかった。渡瀬は壊すなど言ったが、そんな約束など靴の底で踏みしめてやりたい気分だった。

一人で飲んでいると、脳味噌の中に、手足をバババにされたマリカの姿が鮮明に浮かびあがった。床の上に転がされた胴体、あちこちに散らばる手足、頭部、それを陶然と見下ろしている自分自身の姿。北澤は、その鮮烈なイメージに悪酔いしそうになった。これもマリカが見せる夢の一つなのか。自分の内部にあるものが、彼女の力で、心の表面に浮上しつつあるのだろうか。おれの心の中には、美しい女の体をバババにして、それを眺めながら、うっとり陶酔していたいという欲望でもあるのだろうか。そういう気違いじみたファンタジーが、心の底の底で、炎のように燃えているのか。

ビールの缶を握り潰すと、北澤は、鞆から糸鋸と錐のセツトを取り出した。

マリカに近づき、拳で全身を叩いてみた。

頭部には木がしっかりと詰まっている。手足も同様だ。胴体を叩くと虚ろな響きが返ってきた。確かに中に空洞があるらしい。音を頼りに洞を探した。胴体の中央部あたりをその場所と見当をつけた。北澤は、マリカの腹部に

錐の先端をあてがった。が、考え直して背中へ回った。

マリカは《ウツホ木》だと渡瀬は言った。この木彫りの中に、どれぐらいの大きさかわからないが空洞があつて、そこに何かが棲みついているのだと。北澤はそれを見たかった。からっぽなマリカの命の源　もし、そいつが全ての元凶なら、中から引き摺り出して叩き潰してやる。

人間なら背骨があるあたりに錐で窪みを作り、そこに糸鋸の先を差し込んだ。アルミ箔で作った皿で木屑を受けとめながら、像の背中に穴をあけてゆく。木屑は、あとで接着剤と混ぜ合わせて、穴を修復するために使わなければならぬ。仕上げに、トノコを塗り込んで滑らかに仕上げてやれば、ある程度の誤魔化しは効くだろう。長期間、騙し続けることは無理かもしれないが、鋸刃は順調に木材を削り、刃先は、少しづつ像の背中へ食い込んでいった。しばらくすると、ふいに抵抗がなくなって刃がズボツと中へ吸い込まれた。そして固い壁に衝突した。刃先が生き物や物質を貫通したという感触はなかった。単に、からっぽな穴の内壁に突き当たったという感じだった。北澤は、鋸刃を上下に動かしてみた。が、触れるものは何もなかった。

本当に、洞があるだけなのか？

北澤は、糸鋸をゆっくりと引き抜いた。抜き出された鋸刃には、全体に、白っぽい粉のようなものが付着してい

た。指先で撫でてみると、やや粘性を帯びた細かい粉が、ねっとりとからみついできた。

何だこれは……。

その瞬間、ふいに頭の中で答が弾けた。

真菌　　？

北澤は悲鳴をあげて洗面所へ走った。蛇口を全開にし、ほとばしる水道水の中で、狂ったように両手を擦り合わせた。石鹸が一回り小さくなるまで、何度も何度も両手を洗った。体が震えた。不吉にも、叔父の死に様が、まざまざと甦った。

落ち着け、落ち着け、落ち着け！

何度も言い聞かせていると、恐怖は少しづつ薄れてきた。が、不安は遠のかない。北澤は蛇口を閉めると、居間へ戻ってキャビネットを開いた。高そうな洋酒の瓶が何本も並んでいる。一番アルコール度数の高いものを掴み出すと、それを持ってキッチンへ走った。

「すまん」と、心の中で両手を合わせて守谷に謝った後、北澤は、シンクタンクの上で、自分の両手に酒をぶちまけた。強烈なスコッチの芳香があたりをたちこめた。酒の匂いは、ふいに喉の渴きを意識させ、氷の鳴るオンザロックの旨さと冷たさを思い出させた。こんな高い酒、おれの一生で、いつたい何回ぐらい飲めるのだろうか。そんな馬鹿なことを考えながら、北澤は両手を丹念に擦り、充分

にアルコール消毒した。それから洗面所の石鹸をもう一度使い、酒の匂いをきれいに洗い流した。

鋸刃は、流水で洗った後に、何度も熱湯をかけて消毒した。マリカの背中に開けた穴は、洗濯機の横にあった掃除用のゴム手袋をはめて修復した。とてもではないが、二度と素手で触る気にはなれなかった。

全ての作業を終えると、北澤は、来客用のソファにぐったりと身を投げた。

マリカは相変わらず、彫刻として居間に佇んでいた。その表情に特別な変化はなかった。北澤の一連の騒ぎを嘲笑うように、うつすらと美しい笑みを浮かべていた。

この美麗な木像の体内に、カビがびっしりと繁殖しているなどとは、とても信じられなかった。洞の中に充満している真菌は、じわじわと菌糸を伸ばして滑らかな木肌にその先端を食い込ませ、彼女の体を、ぎしぎしと侵し続けているのだ。いや、侵されているのではない。真菌自体も、彼女の体の一部なのだ。人間の身体が、水分と蛋白質からできているように、マリカの身体は、木材と菌糸によって構成されているのだろう。

多分叔父は、ちょっとした傷口が粘膜から、そのカビを体内に取り入れてしまったのだ。偶然だったのか、何かの策略だったのか。そこまではわからない。今となっては、わかる必要もなかった。叔父はもう死んだのだ。

だが　マリカの中に巣くっているものがカビなのだとしても、それを育てる洞が木像の体内にあるのだとしても、だからといって、なぜこいつは動くのだ。なぜ人間に変化する？　マリカの空洞の中を満たしているものの正体は何なのだ。渡瀬や守谷から受け取った愛情なのか？　空洞自体が引き寄せた何かの魂なのか？　あるいは、カビ自体がこの木像に生命を与えているのか？

北澤はたまらなくなつて、守谷のアトリエへ逃げ込んだ。
ウツホ木。

自然の精霊が籠もる洞。

そんなもの信じたくはなかった。全て幻だ。渡瀬も守谷も狂っている。いや、もしかしたら、一番狂っているのはおれ自身なのだろうか。今ここに自分がいることも幻か。今まで起きた出来事、全て幻だったらどんなに良かっただろう！

様々な考えが、北澤の頭の中を、わんわんと飛び交った。守谷のアトリエには、描き終えた油絵や、描きかけのアクリル画が散乱していた。色彩のオーケストラ。甘い油の匂いが漂う。ログハウスにいる時のような匂いがする。キャンパスの木枠の匂いと、麻布に塗られた膠の匂い。パレットの上の油っぽい匂い。

部屋の中をいらいらと歩き回っているうちに、クロツキーブックの束を蹴飛ばした。ぱらぱらとめくれた黄色い薄

紙に、木炭で描き散らされたモチーフ、エスキースの全てはマリカを描いたものばかりだった。マリカの顔・指・手足・体。守谷の頭の中で組み立てられ、再構築され、シミユレトされたマリカの動き・表情・艶やかな爪と肌・乳房・唇。その体の上に置かれた手のデッサン。胸をまさぐり、彼女の足を撫で、腹の上に指先を這わせている。

横たわっているマリカの表情に苦しみや悩みの色はなく、あどけないぐらいに美しかった。思わず視線が吸いつけられた。木炭で描き出された手のデッサンが、自分の感覚と同化してゆくのを北澤は感じた。溺れる　それは溺れるような感覚に近かった。肉の暖かさの中に沈み込む。あるいは母親に抱かれてるような、甘ったるい感覚。生理食塩水の中に浮かび、ゆるゆると眠りの淵に落ちてゆく感覚に近いもの。

（彼女が欲しくないか、北澤）

背中越しに、守谷が囁いたような気がした。

（欲しいだろう。彼女はおまえの夢そのものだ。おれにはそれがわかる。おまえとおれは同類なものな。さあ、行って、飽きるまで彼女を抱くがいい。そうすれば、おまえの運命は開かれるだろう）

北澤は目を閉じた。歯を食いしばって呻いた。こんな世界に引き摺り込まれたくはなかった。おれはおれだ、守谷。おまえとは違う。マリカの言いなりになどならない、

絶対にならない！

床の上に両膝をつき、北澤は、何冊もクロッキーやスケッチをめくり続けた。

ひきつった声が洩れ出た。めくればめくるほど、怒りと憎しみを掻き立てられた。マリカ、マリカ、マリカ、どこもかしこもマリカばかりだ。こんな場所であいつは生活しているのか。絵を描いているのか。そして夜毎マリカを抱きながら、彼女に望みを叶えて貰おうとしているのか。

埋めなければ。

渡瀬の言っていた言葉が、現実のものとして胸に迫った。自分自身すらも焼き尽くしてしまいそうな感情が、腹の底から湧き上がった。守谷を救い出さなくては。この閉塞した世界の中から。マリカの洞の中から。

北澤は、クロッキー・ブックを置いて、立ち上がった。遠くで、マリカが笑っているような気がした。

散弾銃で殴られた痛みは、当分、おさまりそうにもなかった。土の道を進むたびに、足の底から伝わる振動で骨がきしんだ。

守谷は後ろから黙々とついてくる。時々、銃身の先で背中をつつく。もっと早く歩けという意味表示だった。

待ち切れないのだ。が、北澤には、これ以上歩くスピードを増すつもりはなかった。目的地に着いた時のことを考えると、体力を温存しておきたかった。自分には、まだやるべきことが残っているのだから。

*

分骨された遺骨を貰って帰宅した日、マンションの駐車場で、北澤は一人の男に呼び止められた。

「渡瀬和義さんの甥の、北澤隆史さんですね？」

「そうですね」と答えて、北澤は相手を眺め回した。見たこともない男だった。歳は自分よりもう少し上のように見える。俳優のように整った顔立ちの男だ。

「あなたの叔父さんから頼まれてきました。読んで頂きますか」

男は手紙を一通差し出した。北澤は、レガシイのボンネ
ットの上に、骨壺の入った包みを置き、手紙の封を切った。

隆史へ

この手紙が、いつ頃おまえの手元に届くのか、わたし
は知らない。だが届け主の言う通り、おまえが素直に
行動してくれることを願っている。

この手紙を持参する男の名は《玉梓》、以前おまえに
話したあの男だ。

わたしは再度彼に金を払った。新たな願いを聞いて
貰うためにだ。何も言わずに彼の指示に従ってくれ。
おまえの身を守るためだ。

和義

北澤は視線を上げて男を睨みつけた。相手の胸倉を掴
んで、手元に引き寄せた。「貴様のせいでおれ達がどれ
ほど迷惑したと思ってるんだ。よくもまあ、平然とここへ
来れたものだな」

男は微笑した。「殴るのは用が済んでからにして貰えま
せんか。わたしは前払いでお金を頂いてるんです。仕事は
きちんとして帰らなきゃならない」

「遺言だか何だか知らんが、そんなものはいらん」

「いらなと言われても一旦引き受けた仕事だ。勝手にキャンセルするわけにはゆかないのです」

男は北澤の腕を右手で掴むと、穏やかに自分の体からひき剥がした。さほど力を入れても見えないのに、すさまじい力で、北澤の腕をボンネットの上にゆつくりと押しつけた。北澤の腕は、釘で打ちつけられたように、ぴくりとも動かせなくなった。左手で男の手を剥がそうとしたが、無駄な抵抗だった。

「渡瀬さんの遺骨を見せて頂けませんか」男は、静かに囁いた。「望みはそれだけです。一分もあれば用事は済む」
「……」

「頑固な人だ」男は感心したような口振りで言った。ボンネットの上の包みを左手で掴み寄せ、片手だけで器用に包みを解きながら続けた。「わたしに開けさせたいんですか、それともあなたが自分で開けますか」

「勝手に触るな」北澤は叫んだ。「それはおれの叔父の骨だ。勝手なことをするな!」

男は自分の手を引っ込め、スラックスのポケットに無造作に突っ込んだ。北澤はホツとして自分の手を撫でた。不思議と、痛みは全然なかった。

「今のは魔法でも何でもありませんよ」男は微笑しながら言った。「格闘技の一つでも学べば、あなたにもできるようになりますよ」

北澤は、黙って包みから骨壺を取り出した。手紙にあった癖のある文字は、確かに渡瀬のものだった。今は素直に信じるしかないと思った。渡瀬がマリカを作って以来、おかしな事ばかり続くので、北澤の感性は、いい加減麻痺している。

「こんなところで開けるのか？」

「本当は室内でやりたいんですが、あなたの部屋まで入り込むのも遠慮だね」

男は、上着の内ポケットから葉包紙のようなものを取り出し、折り目を開いた。中には、さらさらした金色の砂のようなものが入っていた。北澤が壺の蓋を開けると、彼は金砂を中へ落とし込んだ。それから壺の中に指を突っ込んで、中の遺骨と金砂を素早くかき混ぜた。一度だけふつと息を吹き込み、それから蓋を閉め直した。

「これで終わりです。ありがとうございます。あとは、あなたの好きなように扱って貰って結構です」落ち着いた眼差しで、男は北澤を見つめた。「まだ、わたしを殴りたいですか」

「いや、やめておこう」北澤は苦笑いを洩らした。「おれの腕じゃああなたに勝てそうにもない」

「賢明ですね」

骨壺を布で包みながら、北澤は訊ねた。「一つだけ聞きたいことがある。なぜ、叔父にあんな不幸な死に方をさせた」

しばらく沈黙した後、男は答えた。

「わたしは世界の因果律を読むことを生業にしている者ですが、世界の全てを動かせるわけではありません。例えば人の生き死に関する事がそうです。渡瀬さんはお気の毒でした。でも、あの方は、結構、幸せに死んでいったんじゃないかと思います」

「あんなに苦しんで死んだのに？」

「像を彫り上げた時点で、彼は既に幸福でした。それ以上を望むなら、奪う立場から与える立場に変わるしかない。でも、彼のような生き方をしてきた人が、そこまで価値観を激変させることが出来るのは稀です。人間は、皆、自分の罪科や業を背負ったまま死んでゆくしかない。彼のような結末はよくあることです。決して、不幸な死に方ではない」

「おれにはそうは思えん」包みのてっぺんにキュツと結び目を作ると、北澤は男に向き直った。「おまえが叔父にマリ力を彫らせた、そのことが、全ての元凶だったようにしか思えない」

「人には、その判断を正しく下せるほどの長い寿命がありません。残念なことですけどね。長い目で見た場合、彼のやったことなど些細なことです。元凶と呼ぶほどにも及ばない」

「だが、おれ達にとっては、その短い寿命の中で起きるこ

とが、人生の全てなんだ」

「わたし達は、平行線のようですね」

アスファルトに焼かれた風が、あたりを吹き抜けた。遠くで子供達の嬌声が響いている。北澤は、渡瀬と同じ問いを発していた。「あんたは、いったい何者なんだ？」

「……そうですね」はにかむような笑みを浮かべながら、男は答えた。「古代には呪術師と呼ばれていたこともありましたが、現代では、わたし達の一族にぴったりの名称なんて、果たしてあるんでしょうか。大いに疑問ですね」

「毎日、こつこつこのことをして暮らしてるのか」

「いいえ。普段は酒場でバーテンダーをやってるんです。酒場はいいですね。社会の素顔がよく見える」

「あの像は、どつこつという仕組みで動いてるんだ？」

「あなたが知っても、仕方のないことですよ」

「穴を開けてみたんだ、あいつの背中に」

男は、ほうと声を洩らした。「珍しい。そこまでやる方は、めつたにいないんですが」

「あの木像には、白いカビがいっぱい詰まっていた。あれは何だ。叔父を殺した真菌か」

「あれは依代よしろなんです。カビを依代にして洞に霊を呼び込み、呪文を使って封じ込める。こつこつ言っても、あなたには、何のことが意味不明だと思いますが」

「確かにそつだな」

「真菌が、普段どこに棲んでいるかご存知ですか」

「やあ」

「森の土壌の中ですよ。自然は菌類の生命で満ちているんです。わたしは彼らの生命力とエネルギーを、ちょっとばかり借用しただけです。あなた方の知っている科学とは、全く違ったやり方ですね」

男は再びポケットに手を入れ、メモ用紙を一枚取り出した。

「これ、あなたにも差し上げておきます。わたしの手を借りたいと思うことがあったら、ぜひ、その番号まで電話をかけて下さい。一カ月以内なら連絡がとれます。どうぞよろしく」

北澤はスラックスのポケットに、紙切れを押し込んだ。

男は、ちょっとだけ頭を下げて黙礼すると、ガレイジを横切って通りのほうへ消えていった。

何度か家に泊まって守谷を安心させた後、北澤は、彼の上京日を狙って、マンションからマリカを持ち出した。渡瀬の遺骨と共にレガシィに積み、ログハウスのある山へ向かった。マリカは結局、北澤の前では、一度も人間に変わることはなかった。北澤の、彼女に対する悪感情が、死ぬほど不味くて、食べたものではないと悟ったのかもしれない。一瞬、山へ埋めるのではなく、海へ沈めてしまったほう

が良いのではないかと、北澤思った。そのほうが手間が省けるし、守谷だって探しようがないに違いない。ここから一番近い海はどこだろう。北澤は、道路地図をめくり、海岸へ出る道を探した。

だが、進路を変え、海へ出る道にさしかかった時、道路の電光掲示板で、そちら方面へ向かう高速道路が、事故で封鎖中であることを知った。偶然の一致に過ぎないのだろうが、あまり良い気分はしなかった。何か海へ出ることを拒んでいる。そんな考えが、頭の端をちらりとよぎった。

北澤は、来た道を引き返した。
迷っている時間は、もうあまり残っていないかった。

*

「多分、このあたりだ」

マリカを埋めた場所まで来た時、あたりはかなり暗くなっていた。が、まだ懐中電灯が必要なほどではなかった。それでも薄暗い森の中は、昼間とは全く違う色彩・光景で、北澤を戸惑わせた。探し出すのに時間が掛かるのは、必定だった。

「どのへんだ」守谷が周囲を見回しながら訊ねた。「掘り返したあとなんて無いぞ」

「草木でカモフラージュしてある。土が柔らかくなっているあたりだ。地道に探ってゆけばわかる。だが、明日にしないか、守谷。これから森の中はどんどん暗くなる。へたをすると迷って出られなくなる。危険だ」

「今探すんだ」守谷は靴の先で、下草を薙ぎ払い始めた。「手伝え。何時間もかかる筈はない。すぐに見つかる筈だ」銃を手にしたまま、守谷はマリカを探し続けた。北澤も気乗りしないままに、そこらの地面を蹴飛ばしていた。

ふと、守谷が足を止めた。爪先で、土をせわしくほじくり返し始めた。その動作が次第に激しくなり、情熱のこもったものになった。

「おい、ちよっと来てみる」

そう言われても、素直に従う気は起きなかった。黙って立ちんぼうを決め込んでいると、守谷は北澤の腕を掴み、強引にそこまで引き摺っていった。

「掘るんだ、マリカはこの下だろうっ？」

「自分で掘れよ」北澤は答えた。「おれは右手を潰されている。両手のあるおまえのほっぺが、効率良く掘り出せるだろうっ……。自分でやれよ、マリカは、おまえのものなんだろっっ？」

守谷はじつと北澤を見つめていたが、やがて銃口を彼に向け、「後ろへさがっている」と命じた。北澤は言われた通り、背中に樹がぶつかるところまで後退した。

自分の足元に銃を置くと、守谷は、四つん這いになって、両手で地面を掘り起こし始めた。もの凄い勢いで土が跳ね飛ばされた。まるで、機械が土を掘っているようだった。荒い息遣いが森の中へ吸い込まれてゆく。穴の中へ半ば身を埋めるようにして、守谷は土砂を掻き続けた。

やがて彼は、目的のものに到達した。荷に掛かっていた紐に手をかけて抱き起こした。ばらばらと黒っぽい土を撒き散らしながら、布にくるまれた大きな荷物が、土中から引つ張り出された。守谷はポケットからアーミー・ナイフを出し、紐を切って布地を切り裂いた。艶やかな赤茶色の女の像が中から現われた。歓声が、彼の喉からほとばしった。

一瞬の間が生じた。

北澤は地面を蹴って前へ飛び出した。守谷が、弓となつて足元の銃を踏みつけようとした。北澤はその体を突き飛ばし、散弾銃を左手で拾いあげ、引き金に指をかけた。大声で怒鳴った。「どけ、守谷。その像から離れるんだ」「マリカを撃つつもりなのか」「守谷は像を抱きしめたまま訊ねた。「そうか……いいだろう……。だが、おれはこのまま動かないぞ。おまえに、おれと一緒に吹き飛ばすだけの勇気があるのか」

「撃つのはマリカだけだ、おまえは関係ない」

「無理だな。素人のおまえにそんなことができるわけがな

い。ましてや、負傷した指で引き金がひけるもんか」

「守谷、今ならまだ間に合う。引き返すんだ、得体の知れない世界から帰ってこい。そいつを粉々に打ち砕いて、陽のあたる場所へ戻って来い。おまえにはそれだけの力がある」

「……」

「どげと言ってるんだ、聞こえないのか！」

突然、守谷が北澤に向かって突進した。北澤はかろうじてかわし、守谷の背中を銃の台尻で殴った。守谷はよくれた。前へつんのめった。北澤は体を捻り、穴の縁に立っているマリカに狙いを定めた。撃とうとした瞬間、守谷が後ろから組みついた。腰のあたりを掴まれ、後方へ引き摺り倒されながらも、北澤は引き金をひいた。

当たってくれ、弾丸！

耳を聳するような轟音が響いた。右肩と両腕にもの凄い反動がきた。同時に像の頭部が、破砕音と共に木端微塵になって吹っ飛んだ。マリカの腹のあたりを狙って撃った弾は、大きく逸れて頭部に命中したのだ。木像の、最も美しい箇所である顔の部分に。着弾の衝撃で像は殴り飛ばされたように倒れ、逆立ちしながら穴の中へ落下した。

守谷の咆哮を聞きながら、北澤は仰向けに地面へ倒れ込んだ。一旦は彼の体がクッションになったが、すぐに地面

の上へ投げ出され、乱暴に銃をもぎ取られた。無理な使い方をした右手に痛みが走った。間髪を入れず、鳩尾に守谷の靴の先が飛んできた。北澤はその一発だけで完全にダウンした。背を丸め、腹をおさえて地面に両膝をついた。守谷は北澤の胸倉を掴むと、ざらざらした太い樹の幹に背中を打ちつけた。後頭部と背骨を打った衝撃に、北澤は目が眩んだ。再び腹を蹴り上げられた拍子に、口の端から胃液を嘔き出した。右手を捻るように掴まれた途端、北澤は叫び声をあげた。激痛に身を振らせた。そのまま気を失いそうになった。

守谷は、怒りを通り越して蒼白になっていた。ぶるぶると震えながら叫んだ。

「なんてことをしてくれたんだ、あの美しい顔を粉々にするなんて、なんてことを……」

銃身が北澤の喉を押さえつけた。守谷は銃の両端を握り、北澤の気管をへしゃげ始めた。息が詰まり、気が遠くなった。北澤は彼の両腕を掴み、弱々しく抵抗しながら、力なく笑ってみせた。

今度こそ死ぬんだな、北澤はそう思ったが不思議と悔いはなかった。おれは守谷の目の前でマリカをぶっ壊してやった。海の底へ沈めるよりも、このほうがずっと良かったに違いない。これで諦めがついただろう？ 今度こそ本当に目をさますんだ。マリカは永遠に失われた。もう戻っ

てはこない。これでおまえは、明日から生まれ変わる
ことができる。元の守谷光二に戻れる。誠実な絵描きに
戻ることができる。その代償としておれの血が必
要だというのなら、いくらでも流させればいいさ。ルポ
ライターとして世に出ることだけが人生じゃない。要
するのなら、おれの命ぐらい、いつだってくれてやる……。

もう少しで意識が飛びかけるといつ時、ふいに首にか
かっていた圧力が消えた。北澤は、支えを失ってその場に崩
れ落ちた。地面に倒れた時、遠くから響いてくる、女の
声を聞いた。

（光二さん……）

微かな声だった。消え入りそうなほどに小さな声だ。
うつ伏せになっていた北澤は、頭だけを動かし、目を細め
て声がした方向を見た。前方に盛り上がった土の山が見
える。マリカを掘り出した時にできた土くれの山だ。その
土の山の一角が大きく崩れた。すっかり暗くなってきた森
の中で、それでも何かが、穴の底から這い出してこようと
しているのが、ハッキリと見てとれた。

気配に気づいた守谷が、ポケットからカード型のライト
を出してスイッチを入れた。突然、穴の近くの風景が明る
く照らし出された。丸く切り取られた白っぽい光景の中
で、異様な人影が浮かび上がった。

それは首のない木像の姿だった。散弾で頭部を破壊さ

れ、体の中から白っぽい粉をふわふわと噴き出しているマリカが、ふらふらと揺れながら、それでも着実な足取りで、こちらへ向かって歩いてくる。

(光二さん)

北澤は、再びさきほどの声を聞いた。そして理解した。これがマリカの声なのだ。

(来て……見せてあげるわ……あなたの未来と可能性、あなたの成すべきことの全てを……)

守谷が銃を持ったままマリカに走り寄った。北澤は愕然とした。「馬鹿！ 行くな！ 守谷、帰ってこい！」

擦れた声で叫んだが、守谷は振り向きもしなかった。両手を広げてマリカの体を抱きしめた。

首のない木像と守谷が、恋人同士のように、お互い腕を体に絡ませた。守谷は涙を流しながらマリカを撫で、その首筋に接吻を繰り返した。正気の沙汰ではなかった。が、それ以上に恐ろしいのは、首のない像の腕が、人間のようになやかに動き、彼の背中を蛇のように這い回っていることだった。それは、北澤がついぞ見ることもなかった、人間の肉体を得たマリカの姿だった。夜毎に渡瀬や守谷を誘惑した、幻夢の世界にのみ棲む筈の、得体の知れない怪物の姿だった。

北澤は、余力の全てを振り絞って立ち上がろうとした。肘で体を支え、左腕を突っ張って上半身を起こした。体

を捻って守谷のほうを向き、彼の名を呼んだ。

守谷は、ゆっくりと顔を上げた。その表情からは、苦悩の色が消えていた。清々しいとすら言えるような、静かな面持ちに変わっていた。彼は呟くように言った。「すまん、北澤。おれは彼女と一緒に行く」

左手で自分の体に引きつけるようにマリカを抱くと、守谷は、散弾銃の銃口を地面に向けた。「追わないでくれ」銃声が響いた。北澤と守谷の間の地面で小爆発が起き、土埃が舞いあがった。

守谷は一旦マリカから手を離し、銃の根元を折って空薬莖を排出させると、新たな弾を一発、装填した。そして、もう一度、筒先を北澤に向けた。

「殺さないという約束だけは守りたい。近寄るな。このまま行かせてくれ」

「嫌だ」

「邪魔をするのなら許せない……撃つぞ」

「撃てるもんか……」

守谷の表情が淋しげに歪んだ。「わかるだろう、もう元には戻れないんだ。おまえならそれがわかる筈だ。おまえなら」

首のないマリカに変化が起き始めていた。白い粉が、自分自身の力によって自らの形をこねあげ、人の相貌を作り上げようとしていた。白い塊は、身を振らせながら、や

がて元通りマリカの顔を作り上げた。ショートボブに包まれた、ほっそりとした面立ち。アーモンド型の綺麗な両眼、そこにうつすらと浮かんだ優しげな色。

それは、木像の上に不自然に乗せられた、大理石の首のようだった。白い塊はぼんやりと光り、頭部が揺れるたびに、ゆっくりと明滅を繰り返した。

マリカの微笑みには、嘲笑や毒々しさはまるでなかった。天使のように無機的な表情、誰にも文句のつけようがない優美さと、暖かさと、心地よい冷たさ、性別を越えた麗しさ。北澤は、渡瀬や守谷が、なぜマリカに魂を奪われてしまったのか、ようやくわかったような気がした。この存在には、悪意というものが、ひとかけらも混じり込んでいないのだ。人間の愛情だけを信じて生きている存在

それがマリカだ。そういうものを、いたい誰が警戒するだろう。真剣に憎もうとするだろう。疎ましくは思っても、せいぜいが見ぬふりをして、その存在を自分の中から消し去ってしまうだけだ。北澤は思った。おれほどに彼女を憎んだ者などこの世にはあるまい。おれほどに、彼女を叩き壊してしまいたいと思った者など、この世には存在しないだろう！

(マリカ)

ふいに、別の声がどこかから聞こえた。腹の底へ響いてくる、重々しい声だった。北澤も守谷も、思わずあたりを

見回した。声は次に、もっと二人に近いところで弾けた。

(マリカと行くうんなんて、気が早過ぎるね、守谷くん)

その時、滑らかな動きで、マリカが守谷の側から離れた。声に縛られたように、守谷は棒立ちになっていた。北澤も動けなかった。

マリカは二・三歩歩くと、蛋白石のように輝く白い顔を、ふと虚空に向かって持ち上げた。そして、安堵したような温かい表情を浮かべた。

(来い、マリカ。おまえは、選ぶ相手を間違っているぞ)

マリカは納得したように笑った。像の中から、するりと抜け出した。木像を衣服のように脱ぎ捨てたマリカは、首だけの姿になって、宙をゆくりと舞い飛んだ。

広葉樹の闇の中に、滲み出すように一つの影が浮かび上がった。マリカはそれを見つけると、迷うことなく飛びついた。影は両腕を開くと、マリカの首をしっかりと受けとめた。そして、北澤と守谷に向かって視線を投げた。見覚えのある顔が、いつもの皮肉な笑みを浮かべていた。

「叔父さん……」

半透明な姿の渡瀬が、暗い森の中で、マリカを胸に抱いて立っていた。首だけのマリカは、安らいだ顔をしていた。守谷に抱かれていた時よりも、はるかに安らかな面持ちをしていた。

守谷が、弾かれたようにそちらへ向かって駆け出した。

渡瀬は、片方の掌をゆっくりと前へ突き出すと、

（来るな、守谷くん！）

と、厳しい口調で命じた。

「渡瀬さん……」「守谷は足を止めた。声が震えていた。」マリカはおれのものです。返して下さい。マリカは……」

（言っただろう）

渡瀬は、あざ笑うように答えた。

（君では手に負えない。十年、早いんだよ）

「そんな……」

渡瀬はマリカの頭を抱きしめた。白い大理石のような頭部が、彼の体中へ、あつというまに溶け込んだ。

自分の中へマリカを取り込んでしまうと、渡瀬は満足そうな表情を浮かべた。ゆっくりと、その場から消え始めた。

渡瀬の瞳は、もう北澤達を見てはいなかった。マリカを抱きしめた腕の形を解くこともなく、彼は森の空気の中へ溶け込みつつあった。北澤の肺を焼き続けている、濃い森の空気の中へ。

守谷が散弾銃を構えて連射した。が、そんなものが、今の渡瀬に有効であるわけはなかった。散弾は渡瀬の体を通り抜け、その背後にあった樹木の幹を荒々しく抉り取っただけだった。渡瀬が声もたてずに笑うのを北澤は見た。最後に、ちらりとこちらを見た目つきは、完全に人間のものではなかった。戦慄が北澤の背中を駆け抜けた。あ

れは叔父ではない。叔父の姿はしているが何か別のものだ。マリカと同じものだ。それが今、二人して去ってゆくとしていいるのだ……。

両眼を金色に光らせながら、渡瀬はその場から消え去った。あとには、北澤がマリカと一緒に埋めた小さな壺が転がっていた。渡瀬の骨を納めた壺だ。玉梓と名乗った男が、渡瀬に頼まれて仕掛けをしていた壺だ。守谷がマリカを土中から引っ張り出した時、土砂と共にそこへ投げ出していたのだ。

穴の側には、抜け殻になったマリカの像だけが残った。魂が逃げ去ったあとの、ただの抜け殻が。

守谷が、放心したように土の上へ両膝をついた。微かに肩を揺らし、しばらくの間、断続的に笑い声を洩らしていた。が、やがてその場に突っ伏すと、絞り出すような声で激しく泣き始めた。行ってしまった、マリカが行ってしまった、おれ一人を残して、もう二度と手の届かない場所へと。

自分の目の前で何が起きたのか、北澤は、理屈以外の領域で理解することにした。マリカは渡瀬と共に行ったのだ。あの木像の中に巣くっていた存在は、渡瀬の心の空洞に入り込み、渡瀬はそれによって満たされた。長い間、気に病んできた心の穴を、マリカ自身によってようやく塞

ぐことができたのだ。生きている間には決して叶わなかった望みをやっと得て、満足しながら、この世から去っていったのだ。

だから彼は、もう二度と、この世には姿を現わすまい。

叔父は今度こそ本当に死んだのだ。多分、この結末のためだけに、自分が生きながらえる道を全て放棄したのだろう。そのための契約だったのだ。決して、おれ達を助けるためなどではなく、人間として生きる喜びを、天寿をまっとうするための手段を、マリカと引き替えに全て投げ捨てたのだ。これっぽっちの未練もなく。

あの木像に巣くっていたのは、いったい何だったのだろうか。と、北澤は喘ぎながら思った。あれは自然の中に満ちている生命力そのものだったのか。あるいは渡瀬の分身、魂の片割れ、彼の良心そのものだったのか。だが、それも今となっては、どうでも良いことだった。全ては終わった、おれ達は生き残った。いや、置いてけぼりにされたと言つべきなのか……。

北澤は木の幹を頼りに、何とか立ち上がった。樹木にもたれ、全身の痛みには震えながら、歯を食いしばって呻き声を押し殺した。

傷口を縛るため、ハンカチをポケットから引き出した時、小さな紙片が一緒ついてきて足元に落ちた。例の男から

貰った、携帯電話の番号を書きとめたメモだった。北澤は、血まみれの手で、それを千々に引き裂いた。

この手は、もう使い物にならないかもしれない。少なくとも、自分の間は動かせそうにもない。そういえば、明後日が締め切りの原稿が一本あったのだ。印刷所へ回さなければならぬ原稿が。この怪我でワープロのキーボードが叩けるのだろうか、と北澤は、ぼんやりと思った。が、それが何だというのだ。おれは守谷を取り返した。人間の世界に連れ戻すことができた。それと比べたら、腕の一本ぐらい使えなくなることが、原稿の一本や二本落ちることが、いったい何だというんだ！

北澤は、よろよろと守谷に近づいた。足元に落ちていた銃を力任せに蹴飛ばし、うずくまっている彼の側へ、倒れかかるように自分の体をあずけた。

守谷は、北澤の肩にもたれかかった。両手で顔を覆い、必死になって嗚咽を噛み殺そうとしていた。

北澤は彼に向かって言った。

「心配するな。時間はたっぷりあるんだ。おれ達はまだ若い。いつか必ず成功できる日が巡って来るさ。だから、それまで必死になって新しい仕事を探そう。絵を置いてくれる画廊を探そう。おまえの画集を出してくれる出版社を、一緒に探してみよう……」

了

著者紹介

桓崎 由梨 (Yuri Kanzaki)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/y-kanzaki.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel_s/kanzaki/utuho.html

著作：書棚の育て方 (THE WAY OF GROWING BOOKCASE)

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/kanzaki/shodana.html

緑の家路 (THE WAY OF GROWING BOOKCASE)

http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel_s/kanzaki/green.html

うつほのぞう

ウツホの像 (THE EMPTY WOODEN STATUE)

2000年10月1日 第1版第1刷発行

著者 桓崎 由梨 (Yuri Kanzaki)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。